

## よく見ることを学ばせたい

全国個性化教育研究連盟  
副会長 永 地 正 直

総合学習の実践例をNHKの教育テレビで見て、発想の多様さに驚いた。従来の画一的な授業とは大いに違っている。教科書がない、指導書がない、経験者もない、ないない尽くしなのが却って良かったのかもしれない。

全個連夏季研修会山口大会に来て頂いた京都御所南小の西孝一郎先生もテレビに出ておられた。いかにも京都らしく伝統文化をテーマにした総合であった。

ところで総合学習で最も大事な点はなにかと問われれば、私は「対象をよく見ることです」と答えたい。難しい言葉で言えば「観察」である。見ることは人間が経験することの第一歩であり、一番簡単にできることだ。ところが案外なことに、見たはずなのに後で思い出せないことがある。細かい点になると極めてあいまいにしか思い出せない。

しっかりみたつもりなのに見ていなかったことになる。見ることは簡単なようで難しいことなのだ。イギリスの初等学校を視察に行ったとき、職員室（といっても小さな休憩室だが）にこんな文句を書いた紙がはってあった。

「よく見ることを学ぶ子は質問ができる。よく見ることを学ぶ子は理解ができる。よく見ることを学ぶ子は発見ができる」

これは校長先生が子供を指導する上での大事な点を教員に指示したものであった。さすがシャーロック・ホームズの国だと思った。

ここで「よく見ることを学ぶ」と言っている点に注目したい。よく見るのは意識的に経験を積むことで上手になるのであって努力なしには上手になれない。対象を絵に描いてみたり、お話しにしてみたりすることで経験を積むのだ。よく見ることの大事さは、年齢や職業に関係ない。なににでも役に立つ。また、いくつになっても大事である。これこそ基礎基本ではなからうか。総合学習は経験的な学習であるから、人間の五感を総動員して学習するのだが、その中でも観察が大事であることは何度繰り返してもよいだろう。

最近、小、中学校時代の同窓会がよく開かれるが、中に昔のことを実によく覚えている者がいる。なぜそんなに覚えているかと問うと、興味や関心があったという答えが帰ってきた。よく見ることと興味、関心とは関わりがある。また、記憶にもつながっている。

これまでの教育は新幹線授業と言われるように、先へ先へと知識の詰め込みを急いだ。これからは個人の時計に合わせてゆっくりしたテンポで学習できる自由を子供に与えたい。よく見ることを学ぶためには自由がなくてはならぬ。ただし、子供の自由は「かれの弱さによって制限を受けている」とルソーは『エミール』の中で述べている。子供の自由は最初はスプーン一杯程度から与え、自立、自律の増加とともにふやすべきであろう。

「改めて総合学習の第一歩を考える」

【期日】平成11年6月26日(土)

【会場】上智大学7号館・6号館

総合学習をテーマにした学期研究会も5回目になった。今回は、いよいよ来年からの移行措置を迎え、どのように単元作りを行っていくかについて、講演と実践発表が行われた。

【日程】

○開会行事

○講演

①「どのように単元構成をすればよいか」

国立教育研究所主任研究官 奈須 正裕先生

②「総合学習を、どこからどうはじめるべきか」

上智大学文学部教授 加藤 幸次先生

○課題別分科会

A 時間の確保等、運営上の課題

提案 埼玉県・高砂小学校 多田 信夫先生

助言 上智大学教授 加藤 幸次先生

B 題材作りと単元構成

提案 東京都・大正小 五十子 晴美先生

助言 国立教育研究所 奈須 正裕先生

C 時間割編成をどうするか

提案 千葉県阿蘇中 松本 光弘先生

助言 学芸大教授 浅沼 茂先生

○閉会行事

○講演①

「どのように単元構成をすればよいか」

国立教育研究所主任研究官 奈須 正裕先生



いよいよ来年度から始まる総合学習。始めるに当たって、どのように単元を組んでいけばいいかというのは、非常に現場にとって不安材料の一つである。奈須先生は、表題のことについて、総合と教科を対比させどのように二つをとらえていけばいいのかについて話された。

教科(書物教育)

・文化遺産との対決

- ・内容の系統性がある
- ・基礎から応用への単元構成  
(一人一人の生き方のための教科)
- ・系統的な学び
- ・系統的な内容から子どもに意味のある活動へ
- ・知識はそれ自体目的

生活・総合(生活教育)

- ・生活現実との対決
- ・内容の系統はなし
- ・応用(実践)から基礎への単元構成
- ・虫食いの学び
- ・子どもに意味のある活動から内容へ
- ・知識は手段である。

教科か総合かではなく、どちらも両輪で進めていくことを、強調され、講演を終わられた。

(中田 泰志・埼玉)

○講演②

「総合学習を、どこからどうはじめるべきか」

上智大学文学部教授 加藤 幸次先生



「0番として、課題作りの前に、子ども達が課題を感じやすいような問題場面作りを、一生懸命やったらどうだ。一番重要でしょう。」

連続抗議の後半、熱気あふれる会場で加藤幸次先生の事例が呈示される度、参加者は笑

いながらも、「ハッ」と自分に思い当たる節があっただけを重ね、うなづいてしまった。1、何が総合学習か。何でもあり(自主的に運動会をやる、皆でお米を作ればそれでよいか)の現状から、そろそろ「学校のカリキュラム」という意識を持って進まないといけないのではないか。①例示された現代的課題として、福祉を取り上げ、様々な工夫された教材を提示したとしても、教師が用意計画してしまっただけは、社

会科の学習となってしまう。教科に落ち込んでいく落とし穴がある。自ら主体的に取り組んでいかせるための仕込みが大切であろう。②地域の自然や人と関わらせる地域学習・地域素材を「手段」として生かして、現代的な問題に触れさせていくのが大切。(地域の老人施設から福祉課題へなど)・特産物の学習もあるが、地域の川をもとに各々好きな川のテーマを見つけて調べていく事例(神戸の小学校)もある。生活を組み立てる目をもって進むとよい。③子ども達の興味・関心からの課題作りについて。子ども達の生活に目をよくおいていけば、自ずと課題が見えてくる。日記・会話・行事・学校生活学習など。しかし、青年期の問題も(いじめ等)取り上げられるのではないかな。

2. 科学的な問題ばかりではなく、心の問題も必要であろう。どちらにしても、適切な教師の支援がなければ「はいまわって」終わってしまう。教師自身も自ら考えお互いにサポートしあわなくてはならないだろう。

このほか、戦後のコアカリキュラムについて、また最近のアメリカのミドルスクールの動きについてもお話があった。

大入りのために、2回連続講義となり、休憩時間も参加者の対応で休む間もなかった加藤先生の熱気あるお話は、参加者に対しての先生からの熱い支援(エール)であり、参加者の笑いや大きなうなずきは、切実な課題意識を抱えながらも「頑張りまーす」という快い決意表明だったように感じ取られた。

(加藤 久美子・千葉県)

## ○課題別分科会

### A 時間の確保等、運営上の課題

埼玉県草加市立高砂小 多田 信夫先生

発表は、次の柱立てを中心に行われた。

- 1 「総合的な学習の時間」の基本的な考え方
- 2 高砂すくすく学習の実践
- 3 実施上の課題

添付資料としては4、6年を事例としての「総合的な学習の時間を中心とした年間時間割」「年

間指導計画時数一覧」「授業週予定表」「日課表」であった。

「総合的な学習の時間」の基本的な考え方は、子どもの興味・関心を中心に学習を構成するものである。また、高砂すくすく学習の実践では、2年生の「みのった!みのった!あずきから」等の3事例があげられた。

これらの実践から、子どもの生活を重視した学習を成立させ、地域に出て、実地調査をしたり、話を聞いたり、教えてもらったりするなど、地域の人、物、自然と自分が積極的に関わり、自分が解決しなければならぬと自覚する問題に出会うことが、子どもの主体的学習を促し、自分の生活やあり方を見つめ、より生活を充実しよりよく向上しようとするということが述べられた。

実践の課題としては次のことがあげられた。

学級が一丸となる支援のあり方。子どもの興味関心を重視するための学習集団の検討。価値ある学習活動の創造。学習の場を広げる際の留意点、評価、教科・領域との関連等が述べられた。特に総合的な学習の時間を中心とした年間計画の作成が論議の中心となった。ここでは、提示された年間計画、時数は「計画カリキュラム」であり、子どもの実態を加味しながら構想をして、児童の興味・関心や課題に応じながら柔軟に対応し、年間を通して実践しながら修正を図っていくことが重要であるということが述べられた。さらに、教科と総合的な学習の時間が相互に関連させながら、子どもたちの知識・技能を高めるように編成することが重要であることが話された。(山口 真吾・埼玉県)

### B 題材作りと単元構成

東京都台東区立大正小 五十子 晴美先生



”はじめに子どもありきの総合学習”を中心にした「題材づくりと単元構成」について、次のような発表がなされた。

題材づくりは、子どもの願いと教師の願いを十分に話し合うことから始まる。題材づくりをしたら、修正をしていく時間も大切にした。では、どのように題材づくりをするかとい

うと多くは、社会科の「地域学習」から入っている。題材が出やすいからである。また、「総合学習で何がしたい。」という投げかけから、子ども達の願いを生かすようにしている。題材づくりの話し合いをもとに、単元構成をしていく。このような考えに基づいた総合学習の実践例を通して、具体的に説明された。

予想を超える参加者から、多くの質問や意見・感想が出され、熱気あふれる分科会となった。国立教育研究所教育方法研究室主任研究官 奈須正裕先生からは、協議中から大切なポイントの助言を受け、内容がより深まることができた。以下は、奈須正裕先生の指導・助言の一部である。

総合学習の単元は、子どもの問題解決的な活動のまとまりである。一つの活動から複数の内容になる可能性が高いほど、子どもにとって意味のある、教師にとって価値がある総合学習になる。題材づくりの方法は、発表の他に面白い所に連れていったり、先生がよいと思ったことを投げかけたりする。子どもの思いを寄せられるものを探し、納得して進めることが大切である。

### C 時間割編成をどうするか

千葉県八千代市立阿蘇中 松本 光弘先生



中学校の総合的な学習を課題とした分科会Cは、参加者も50名に増え、この課題への関心の高さが感じられた。まず千葉の松本光弘先生から「時間割編成と総合的な学習」というテーマで提案があり、その後、植田由紀先生の司会で参加者との

質疑応答の形で話が進められた。

松本先生からは、2002年からの特色ある学校づくりにあたって、①「50分」をどうするか、②年間授業時数と週時程表をどうするか、といった時間の弾力化運用に関する実践的な問題に対して、埼玉・杉戸中や福島・三春町を例に、総合的な学習の時間のまとめどり、何通りかの時間割の組み合わせ、時間のモジュール化など様々な可能性が示された。また、当然のことながら時間割の問題は総合の時間での単元設定

のしかた、学習の形態、指導・支援体制など、総合的な学習の時間のあり方に深く関わりを持つとの指摘があり、一つのモデルとして阿蘇中の「共存」や「サンクス」の実践例が紹介された。これからの具体的見通しを得る上で、大変参考になる提案であった。

「モジュラー・スケジューリング」については、参加者の三春町・沢石中の先生方から補足の説明をいただき、より理解を深めることができた。それで教科経営はどのように変わったのか等の質問については残念ながら時間の都合もあり、十分に深い議論はできなかった。また、「総合づくりのヒントを」という質問には、松本先生から①学校としてねらいやテーマを決めること、②まずまねをしてみることに、③支援組織がやりやすいように計画をつくること、④年間の見通しを持つこと、そしてなにより子どもの意欲を高めること等の説明があり、実際に2年間やって職員室での会話が変わったという話が印象に残った。

最後に、助言者の浅沼先生からは、総合的な学習の実践のレベルにもいろいろあること、無理して教科横断等をするのではなく、大切なのは問題解決する力をつけていって「こどもの生き方」を強めること等の話があった。また、「学習」とは何かという深い問いや何がどう問題解決につながるのかという学習のパターンについての理論研究が足りないこと、教師自身のイメージをもっと膨らませていく必要性など今後の課題が提示された。(米澤 利明・神奈川県)

#### 研究発表の情報をお寄せください

これから、秋にかけて研究発表を控えている学校も多いかと思います。会員の皆様の学校で、研究発表を予定されている学校がありましたら、事務局までお寄せください。



学習は生き方の学習であり、学習テーマは「はじめに子どもありき」と考えて、「〇〇したあ〜い」という自分の夢や願いを大切に決めていく。夢や願いに対する思いが大きければ

大きいほど、その問題を迫る意欲が強くなる。教師はウェビングをし、どこに教育的価値が見出せるかを把握し、学習テーマを選択している。そして、遠足や社会科の学習などを通じて地域を見る中で学習テーマを決め、問題解決をしていく。問題を解決する過程で児童が困ることによって追究がさらに深まるので、意図的に困らせる支援も行う。さらに、体験活動を重視し本物をやらせることにより社会現実とぶつかることができる。振り返りでは、自己評価や相互評価・ポートフォリオによる評価を行っている。児童は学習の主体者であり、教師の役割は児童の側に立って共感し、児童の願いや思いに沿って、あたたかく支援する。

4年生の実践の「しあわせバーベキュー計画」は、米作りをしたいという意見から始まった。田が借りられず、空き地の開墾から実践が始まった。肥料のことをJAの人に聞きに行ったとき面積の知識が必要になり、算数の単元を入れ替えて面積の学習をした。必要な時必要な学びをすることで意欲が高まった。生育途中では農薬散布が問題となり、環境などの問題と出会った。案山子作り・収穫・脱穀・精米・梅干し作り・塩作り・学校の周りの土を粘土にしての器作りを行いパーティーを行った。児童は毎時間学習計画カードで振り返りを行った。

教師はこの一年間の実践結果を年間実施記録としてまとめた。(埼玉・加藤 勇)

《中学校部会》

## 田布施町立田布施中学校

田布施中学校では、「はじめ」というテーマをきっかけに、『生き方学習』が始まった。生き方学習は、道徳・特活にとらわれない学習としてとらえ、生き方についての選択を迫る場面を意図的に設定するという点では教師側からの総合的な学習といえる。

その生き方学習の一つとして、文化祭学年展示をどのようなテーマにするか生徒に話し合わせたところ、『福祉』をテーマに選んだ。そして、この『福祉』から何をイメージするかを生徒に投げかけ、各クラスからサブテーマを出させた。福祉の仕事、阪神大震災とボランティア・車椅子体験を通して・中学生の僕たちにできること・視覚障害者のために考えるなど。さらに、各クラスがグループになり、課題解決のためにいろいろな迫り方を細かく考え実践活動した。福祉協議会や各福祉施設、またボランティア活動の方々への取材、車椅子・アイマスク体験、収集ボランティア、点字など文化祭で調べ学習・体験学習のまとめとして発表した。自分たちの生き方を見つめたり、町を



見つめるよい体験になり、各自がより望ましい生活を考えることができた。これは、生徒の興味・関心に基づく課題から、課題の解決方法も生徒にまかせた生徒側からの総合的な学習といえる。

いじめをきっかけに始まった生き方学習から、生徒たちが福祉を選んでいき、さらに各クラスでウェビング(Webbing)の良さをうまく利用した工夫されたよい実践例であった。(神奈川・広瀬俊幸)

## 宮田町立宮田西中学校



宮田西中の実践は、「これまでの活動実績一多様な学習・体験活動」という報告のテーマ通り、①課題解決的・探求的な学習・体験的活動の工夫②「生きる力」の育成③マルチメディアの取り入れという具体的な方針を確立しながら、まさに多様な体験的・総合的な学習に取り組んでいる。報告は主に環境問題に主体的に取り組んだエコマップ修学旅行とそれにつながる実践としての諫早湾干拓事業見学等であった。社会の「世界の環境問題」の学習をきっかけに「ムツゴロウを助けたい」という生徒の願いから始まり、干拓の歴史、ムツゴ

ロウの生態、ムツゴロウへ捧げる歌、ホームページづくり等と様々に学習課題が広がっていったこと。その過程を通して生徒がたくましく変わったことに感激したという藤淵校長のお話があった。まず子どもたちの問題から出発したいというねらいがあって、問題から課題に広がり、そこからさらに問題が出て、次の課題をつくり出すというたいへん参考になる実践例である。

宮田西中の実践にはなぜ迫力があるのか。それはテーマが「なぜWHY」を追究しているからであるという加藤先生のご指摘があった。テーマは「・・・について（なにWHAT）」が多いが、これで追究するのは知識である。これでもいいが、「なぜ」と問わないと強力にはならないというお話に得心した。ぜひ宮田西中のホームページにアクセスしてみたい。

(神奈川・米澤 利明)

8 / 5 (木)

### ○講演③

#### 「感育と総合学習」

神戸大学名誉教授 鈴木正幸

今回の改革が明治・戦後に改革に続く、第3の教育改革となり得るかともまず問題提起された。

今回の改革の基本は、

「知る」の岸から「分かる」の岸へ移すことで、従来の学校は「知る」こと一教師が中心に教え・たくさんの知識を持つこと・知識の再現・斉指導一が中心であった。これを「分かる」ことを

中心にすることである。「分かる」ことにならないと「生きる力」にはならない。「分かる」ことは子どもが中心の活動であり、活動は学ぶことである。活動の過程で調べる・追及する・課題解決等が行われる。これは革命的改革である。「知る」の岸から「分かる」の岸へは、「体験の川」を自力で渡る必要がある。原体験あつての学力である。ここで必要なのが「なるほど」「納得」などのN体験であり、子どもの価値判断の尺度となる。

そして、「知る」「分かる」「体験の川」の土台となるものが「豊かな感性」であり、「感性」が興味・関心のベースとなる。したがって、平

面的な知育・徳育・体育の三育から、感覚を育てる教育一感育一を合わせた立体的な「四育」にする必要がある。

総合的学習は即興的に曲を作るようなものであり、一人一人のものさしが違うので学習の過程が大切である。感育をするためには、教育の3K(形骸化・画一化・硬直化)や3K主義(計画主義・形式主義・管理主義)から脱却する必要がある。「知る」ことの上に「分かる」にならなければならない。これには豊かな感性一喜怒哀楽の経験一が必要である。探求心のきっかけや意欲のベースとなる「感育」が大切である。また、感育をするためには教師は脳の学習が必要であるなど、自分の体験を織り交ぜての講演であった。(埼玉・加藤 勇)

### ○シンポジウム

「どのように総合学習を進めるのか」

- ・池田 信一(福岡県志免町立志免南小学校)
- ・三好 祐司(田布施町立田布施中学校)
- ・小川 礼子(岡山県寄島町立寄島小学校)
- ・河合 剛英(神奈川県平塚市立港小学校)

助言者

浅沼 茂(東京学芸大学教授)

奈須 正裕(国立教育研究所主任研究官)

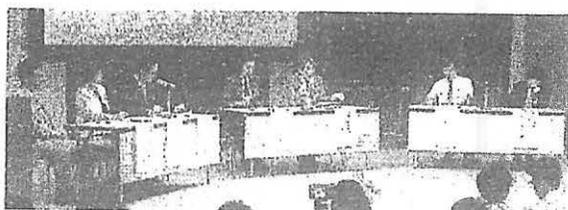
司会

佐久間茂和(東京都台東区立大正小学校)

〈河合〉教師集団の意識改革が大切。教科を旧態依然としたままで総合をやっても本物にならない。問題解決学習に。学年主任がネックになるなら替える。個別学習やT・Tを取り入れてきた学校ではあるが、2~3年かかった。自分の子どもという意識が抜けない。学級差が心配なので、学年で取り組んだ。

〈池田〉研究推進校の役割を果たしてきた学校でも、教師の意識改革が難しい。検討委員会をつくり、単元づくりの構想に入った。“教師がはまって、子どもがはまる”が大事。6年生は、福祉病院訪問で変わった。子どもの問題解決とは何かを、具体的な活動を通して話し合った。いいものは残そうと、タイムテーブル(やったことをそのまま記録する)を作成している。

〈小川〉昨日のオープンマインドともう一つ、考えが同じ学校との交流が有効である。先進校の遷番小学校へ何度も足を運び、まねることからスタートした。その前は、内容から入って失敗し、子どもに戻ることを痛感した。子どもた



ちがやってみたいことは、子どもの動きが違う。地域も動く。しかし、人に伝えることは難しい。一緒にやっていく中で感じとってもらおう。T、Tがうまくいってないと難しい。交流校があると、単元構成のときにディスカッションをし、様々な視点から検討できる。

〈三好〉教育課題の研究指定校を受けた中学校。選択学習、生き方学習の研究があり、その後、総合的学習に取り組んでいる。T、Tは、T、Tでなければできないこと、選択教科はその先生でなければできないもの（趣味）をやっている。高校入試、時間割、部活など、障害は多い。トップダウンでは、意識が高まらない。研修通信でアピールしてきた。学年体制でやってきたので、振り返ったら、総合になっていた。おしつけでなく、よかったことは知らせ合う。みんなでやってよかったと思えるできごとを積み重ねていきたい。総合の学習は、体験活動からはいつている。

〈奈須〉子どもと教師は、対立するのではなく話し合えばよい。活動からといわなければ、先生方は、動かない。子どもの完全な自由な発想はない。環境との出会いで活動が生まれる。教師は、きっかけでしかない。基盤は、子どもの生活。中学校では、教師の投げかけでよい。価値があるかどうかは、子どもが決める。口で言わなくても潜在的な求めがある。教師は、子どもの動きを見て刺激していくことが必要。

〈浅沼〉「総合で生き生きしてどうなるか。」とか、「中学は余計なことをしてくれるな」と、学力の低下が心配されている。はたして、そうだろうか。活動しながら、課題が出てくるのは本当である。やって見るとよい。子どもが変われば、教師も変わる。（東京・堀竹 蝶子）

## 〇実践報告

～野の教育塾、きのくに子どもの村学園～

2日目の午後は、広島県の野の教育塾と、きのくに子どもの村学園の実践報告が始まりました。野の教育塾の実践は、広島県北の作木第二小学校の中村公子校長先生からの報告でした。

地域の川である、江の川でのいろいろな体験活動を、楽しいエピソードを交えながらお話して



くださいました。「子どもたちの心に、ふるさとに生きる人たちの今を、そして自然と歴史を刻み込み、ふるさとで生きる力を育む、ふるさと教育」を掲げ、元

に実践されているようでした。



きのくにの実践は、福井の「かつやま子どもの村小学校」からの報告でした。自己決定・個性化・体験学習の3原則を柱にした、様々な実践をお話していただきました。特に総合学習については、「生きること」をテーマと

して、生きるための基礎的な営みである食べる・着る・住まうの3つに題材を求めて実践をされているということでした。毎日の活動として、朝の会の話が出ました。総合学習での朝の発表の時間・話し合いの時間の大切さを改めて感じました。

資料として配られた「子どもの村通信」には、縦割りのクラス（工務店）で子ども達一人一人が自分の課題に没頭する姿が所狭しと綴られていました。（神奈川・肝付 幸枝）

## 〇講演④

『どのように題材を構想すればよいか』

国立教育研究所 奈須 正裕先生  
総合学習が分からないという人は、教科が分かっていない。教科が分かかっていなければ、総合学習は分からない。

国語を例にとる。国語は日本語の学習とはいえ、何故、国語だけが同じ文章を20回も読むのだろうか。それは、あえて普通ではない日本語との向き合い方をしているのである。

つまり、日常生活では出会えないような言語運用と出会い、私たちが使っている日本語の中



に「洗練された文化」と呼べるような高度な言語の世界が存在しうること示してその世界が持っている奥深さや広がりやよさを自覚し、文化創造の営みを知り、その世界をもっと自分の中に入れていこう、教養の世界を取り入れようとするの

が、国語という教科である。だから、教科は非日常的で、意図的で、組織的である。

それに対し、総合学習は、非日常を扱うのではなく、「日常行われている生活」そのものを対象とし、それを自覚し、吟味してより望ましい自分へと更新していく。

両者を比較してみると、教科は普遍性のある文化遺産を対象とした「書物教育」である。はじめに系統性のある内容があり、それを計画的に学んでいく。それに対して、総合は、日常を改めて顧みた時に自覚される生活現実を対象とした「生活学習」である。生活を自覚した時に生じた願いを、実践を通して問題解決をして(吟味)、そして自己を更新していく。そのため、総合で得る内容や知識は実践の為に獲得し、それを手段として用いているのである。

(東京・大野 俊一)

### 会費納入のお願い

本年度の会費未納の方がいらっしゃいます。振り込み用紙が届きましたら、お早めに郵便局へ足を運んでいただきますよう、お願い申し上げます。

事務局へのお問い合わせは・連絡先  
〒115-0044 東京都北区赤羽南 1-16-2-504  
Tel. 03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和  
e-mail sakuma.s@ma4.justnet.ne.jp

### 全個連HP開設

最近、インターネットをされている方も多く、他の色々な研究団体でもホームページを開設しているところも、多くあるようです。全個連でも、インターネットにホームページを開設しました。会報や、最新の研究発表のお知らせ、全個連の研修会の案内や速報など、最新の情報をお伝えしていきます。ぜひ、インターネットに接続できる環境をお持ちでしたら、アクセスしてみてください。

URL:<http://www4.justnet.ne.jp/~k.m/>

### 全個連おすすめ図書

総合学習がいよいよ来年から始まりです。各校でも、研究を進めていることと思いますが、全個連に加入していらっしゃる先生方の書かれた本をぜひご活用ください。

「児童・生徒の興味・関心に基づく総合学習」加藤幸次・佐藤有 編著 黎明書房

「総合学習の理論・実践・評価」  
高浦勝義 著 黎明書房

「総合学習を指導できる“教師の力量”」  
奈須正裕 著 明治図書

全国個性化教育研究連盟会報 第52号  
平成11年9月11日発行  
編集責任者 事務局長 浅沼 茂  
編集 広報部 中田 泰志